

◆ 特別講演 ◆

日本人と木の文化

— 顕微鏡でみた文化史 —

千葉工業大学理事・教授 小原二郎
千葉大学名誉教授

この講演の内容は、自然科学的な手法によって文化史の研究に貢献できないか、という試みについて述べようとするものである。具体的には、食事をするとき、ヨーロッパ人は金属のナイフとフォークを使い、中国人は象牙の箸を使う。だが日本人は白木の割箸のほうが美味しいと思う。その理由はなぜかということ、科学的に証明しようというところにねらいがある。考えてみると実はそうした違いこそが文化であって、気候風土と長い生活体験から生まれたものであるから、理論的に証明することは難しい。しかし中国の陰陽五行説では、中央が土で東は木、西は金であると説き、またヨーロッパ文化に対する日本文化の性格の違いは、金に対する木で説明されることを考えると、それを裏付ける何らかのデータが得られるかも知れない、という考え方も出てくる。

ところで私たちは普通、材料の優劣を論ずるとき、それぞれの特性を取りあげて、各軸ごとに試験を行い、その数値によって良し悪しを判断する。だが木材はこのタテ割り評価法では優秀性を証明することはできない。

なぜならどの軸を取ってみても、最高にもならないが最低にもならないからである。これは木綿と絹についても同様である。だが、「ふうあい」までを含めて総合的に判断すると、こんな優れた繊維はない、ということは専門家の誰もが肌で知っていることである。だがタテ割り評価でそれを証明することは難しい。生物材料というのはもともとそういう宿命をもつものようである。

そこで考え方を変えて人間工学的な発想に立ち、人間の肌合うものほど良いというヨコ割り評価法を取ると、木綿や木のような生物材料の良さが浮きあがってくる。だがそれでもなおわれわれの感覚的評価とはほど遠いものがある。そのことについて以下に述べよ

う。

まず中心に人間を置くと、人間にいちばん近いところに来るのは、何といっても生物材料である。生物材料の代表は木綿と木だが、人間はもともと生きものだから、そうした生きものの材料がいちばん肌に合うし、心も安まるはずである。

それなら次に来るものは何であろうか。それは自然材料だ。自然材料の代表は土だが、土もまた生きている。われわれがなに気なく踏む足の下には、何千何万という小動物や微生物が棲んでいて、土を生き物にしている。だから夕立ちが降ったくらいでは谷川の水は濁らない。公園やゴルフ場の芝は緑に映えて美しいが、雨が振るとまっ赤に濁り水が流れ出る。まがいもの自然だからである。

土が死ぬと砂漠になる。だが死んだ土も火という生き物の手をくぐると、もう一度生命を帯びた焼物になって、われわれに近づいて来る。陶器の最大の魅力は人間くささにあるとってよかろう。とすれば土の次に陶器である。石もまた不思議な魅力をもつ。だが考えてみると、石は地球という大きな窯の焼物のはずである。そう考えれば石のもつ魅力の秘密もなんとなく理解できるような気がする。

それなら石の向う側に位置するものは何だろうか。それは鉄とガラスとコンクリートだ。これらはいずれも、もともと自然界の中にあった素材であった。それを精選してつくった材料である。だからわれわれの肌にかからうものはそれほど多く持っていない。

ところでその次に来るものは何であろうか。私はかなりの距離をおいてプラスチックがあると思う。それはもはや生物的嗅覚という大きな谷間を越えた、向う側にある材料といったほうが当たっているかも知れない。なんとなく肌になじまない何かがあるからである。天然の材料は朽ちてやがて自然に戻るが、プラスチック

クはあの生々しい色を永久にさらす。それがはかない生命を持つわれわれに抵抗感を与えるのかも知れない。

これらは地球の表面にあった材料を、人間との親しさを軸にして論じたものであった。このようにみていると、木のよさは少しだけ浮かびあがってくるが、それでもなお、われわれの感覚的評価とはほど遠いものがある。

そこでこれにもう1つの軸を加えてみることにした。その第3の視点を時間軸とする。その意図は日本人と木がどのようにかかわり合ってきたかという、木の文化のルーツを探ろうというねらいである。

私が採った研究の方法は、古い時代の彫刻にどのような樹種が使われていたかを明らかにしようというものであった。そのように考えた理由は、彫刻には時代によって様式の移り変わりがあるが、それに伴って、用材の種類も刃物も変わっているのではないかと考えたからである。そこで飛鳥時代から鎌倉時代に至る期間の木彫仏の中から、750体の材片を集め、これを顕微鏡で調べて仏像の樹種戸籍表をつくり、彫刻様式の移り変わりと、用材の種類の変り変わりとの関係を明らかにした。

このようにして得られた彫刻用材の流れ図について、

印度、中国、朝鮮に源流を求めて整理し、考察を加えたのである。

その結果をまとめると次のようになる。

- (1) 日本文化の特徴は、輸入文化を最初にまず忠実な形で模倣するが、しばらくすると独自のものを創り出していき、という経過の繰り返しとみてよい。顕微鏡でのぞいた彫刻用材の歴史もまた、同じ道筋をたどっている。
- (2) 日本人の白木好みは、和風文化の興った平安時代の初期から始まったとみることができる。
- (3) いまなぜ木なのか、という質問に対しても、納得のいく説明が得られた。
- (4) 木材のような単純な素材でも、タテ割りだけで評価することは無理がある。生物材料の評価はいくつかの軸で補って、総合的に判断する必要がある。

(注) 上記の内容にご興味をお持ちの方は下記の拙著を参考にしていただけましたら幸いです。

- (1) 小原二郎 法隆寺を支えた木 日本放送出版協会 NHKブックス
- (2) 小原二郎 日本人と木の文化 朝日新聞社 朝日選書